J-CEF NEWS

no.2

2014 WINTER

リレーエッセイ

点を打つこと、繋ぐこと
／黒崎洋介（神奈川県立湘南台高等学校教諭）

実践事例紹介

「まちつくクラブ in 湘南」の取り組み
／名城可奈子（湘南まちいくプロジェクト）

書評

「シティズンシップの教育思想」小玉重夫著
「シチズン・リテラシー　～社会をよりよくするために私たちにできること～」鈴木崇弘ほか編著
／長沼豊（学習院大学文学部教育学科教授）

特集

「シティズンシップ教育を進める上で何を大切にするべきか ？」
／伊藤章（NPO 法人国際ボランティア学生協会理事）
／中村陽一（立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科教授）

リレー
エッセイ

点を打つこと、繋ぐこと

神奈川県立湘南台高等学校
教諭　黒崎 洋介

「選ぶ道がなければ、迷うこともない。私は嫌になるほど自由だった。」

阿部公房さんの小説『鞄』における締めの言葉です。『鞄』は、高校の国語の教科書にも取り上げられる作品です。まるで意思を持っているかのような鞄によって導かれ、何も考えることなく、ただ鞄に身を任せて歩く男の物語です。この作品を題材とした授業では、「鞄は何を表しているか」という問いがたてられます。「選ぶことのできる道がおのずから制約されてしまうわけです。鞄の重さが行き先を決めてしまうのです。」という言葉や、冒頭の言葉から、鞄が人間から主体性を奪うものの象徴として描かれていることが分かるのです。

この『鞄』という作品は、教育が抱える課題を私たちに教えてくれます。これまでの教育は、子どもに鞄を持たせることに躍起になってきました。そして、鞄の中に「良い大学 - 良い会社 - 良い人生」という一元的な価値観を善意で詰め込んできました。確かに、現在私たちが享受している豊かさは、こうした教育の成果と各人の努力の賜物です。しかし、多くの課題が山積する21世紀の日本社会では、社会の変化に伴い、鞄は古くなり色あせてしまいました。それにも拘わらず、私たちはあえて気づかないふりをしながら、執拗に子どもに鞄を持たせてはいないでしょうか。そこでは、教育の目的は「会社人」の育成とされ、偏差値が幅を利かせ、受験に必要な知識だけが効率よく詰め込まれていきます。子どもが主体的に考え判断することはなく、まるで無色な人間ができあがります。ある子どもは古ぼけた鞄に必死にしがみつき、別の子どもは鞄に身を任せ、また別の子どもは鞄から振り落とされています。これが、私たちが向き合うべき教育の課題です。

一方で、『鞄』は、教育が秘めている可能性も私たちに感じさせてくれます。作品中では鞄に導かれる男のその後の動向は記されていないため、「このあと男はどうなるか」という可能性ある問いをたてることもできるのです。昨今の学校内外における多くの事例が物語るように、鞄に頼らなくても、自分たちで道を選び、自分たちの足で歩いていくことを目指した教育が増えています。例えば、新学習指導要領で重視される「習得・活用・探究」という学習方式は、社会の諸課題を知り、解決策を考え判断し、解決に向け行動する姿につながります。また、協同的な学び合いや言語活動の充実は、課題の解決に向け多様な他者と協同する姿につながります。こうした教育の目的は「社会人」の育成とされ、確かな知識に基づいた価値判断や意思決定を通じて、実社会や実生活に生きる力が備わっていきます。暉峻淑子さんが著書『社会人の生き方』の中で指摘するように、「会社人」と「社会人」という一文字入れ替わっただけの言葉が持つ意味合いは大きく異なります。これがシティズンシップ教育の可能性であり、次代の教育の理念でもあるのです。

私は、教育を「点を打つこと、繋ぐこと」だと考えています。点と点を繋ぎ、多様な線を描くには、より多くの点を打ったほうがよいでしょう。また、点を繋いで線を描かなければ、ものさしで長さを図ることはできません。教育を巡ってはどちらか一方が語られることが多いですが、私は、点を打つことと繋ぐことの両方が大切だと思うのです。シティズンシップ教育の積み重ねが、多くの点を打ち、線で繋ぐことにより、豊かで温かな「場」を創れるようにしたいものです。

黒崎 洋介(y-kurosaki@pen-kanagawa.ed.jp)

実践事例紹介

社会教育

「まちつくクラブ in 湘南」の取り組み

～学校を越えて、ともにまちをつくる高校生の活動～

湘南まちいくプロジェクト
名城 可奈子

高校生が、自分たちの住むまちと向き合い、まちをより良くする活動を仲間とともに練り上げ、実現していく。そうした学びの機会を高校生に届けたいという思いから、学生や若手社会人が中心となって作られたシティズンシップ教育の実践がある。神奈川県の湘南地域を舞台とした「まちつくクラブ in 湘南」だ。

本実践紹介では、昨年行われた「まちつくクラブ in 湘南」の第 1 期の活動を、第 1 期のリーダーを務めた名城可奈子さんへのインタビューも交えながら取り上げる。活動の概要や流れなどに加え、参加高校生の変化や、高校生をサポートしてきたみなさんの思いや大切にしていること、今後の課題や展望などについてお伝えしたい。各地で実践に取り組まれている方や、これから活動を展開したいという方などにとって、一助となれば幸いである。

1）2013 年度実践紹介

「まちつくクラブ in 湘南」とは？

「高校生がまちに参画する学びの機会を、湘南地域で幅広くつくりたい」という構想のもと、2012 年 8 月に「湘南まちいくプロジェクト」が設立された。その最初の取り組みとして誕生したのが「まちつくクラブ in 湘南」である。（「湘南まちいくプロジェクト」には、「まちつくクラブ in 湘南」の他にも、高校と連携した授業実践をはじめ、湘南地域の高校生を対象にした幅広い活動構想がある。）

「まちつくクラブ in 湘南」は、藤沢・鎌倉地域の高校生が学校を越えて集まり、自分たちの住むまちを良くするための活動を行うクラブである。運営は「湘南まちいくプロジェクト」の大学生・院生や若手社会人が担い、公益財団法人藤沢市みらい創造財団の共催支援事業として実施された。初年度である 2013 年度は、5 校から 9 名の高校生参加者を集め、6 月から 10 月まで活動が行われた。「まちつくクラブ in 湘南」の運営を担い、高校生の活動のサポートをする若手社会人・大学生・大学院生は、「サポーター」と呼ばれる。

「まちつくクラブ in 湘南」は、あらかじめ決められたボランティア活動に高校生が参加するといった取り組みとは異なり、高校生が自らまちを良くするための企画を考え、実行していくことが特徴的である。また他にも、学校を越えた生徒のつながりや連携が生まれることや、高校生との距離が近いサポーターの存在など、いくつもの特徴的な点があるシティズンシップ教育の実践だ。

2013 年度活動の流れ

「まちつくクラブ in 湘南」の活動は、高校生同士の交流や、高校生とサポーターの交流から始まった。学校も学年も異なる高校生が集まり、ともに企画を進めていくにあたって、まずは互いのことを知り、交流を温めることが大切だと考えたためである。

6月	交流	**まちつくクラブを知り、仲間を見つける** ・オリエンテーション　6 月 16 日（日） ・交流会　6 月 23 日（日）
7月	企画	**まちの課題を探し、問題意識を共有する** ・企画の立案　7 月上旬～中旬
7月↓8月	実行	**課題解決に向けて、実際に行動する** ・準備　7 月下旬～ 8 月中旬 ・実行　8 月中旬～下旬
8月↓10月	発信	**活動の成果を発信し、学びや成長を実感する** ・振り返り　8 月下旬 ・報告会準備　9 月～ 10 月上旬 ・報告会　10 月 6 日（日）

表 1：活動の流れ

最初に行われたオリエンテーションでは、サポーターによる「まちつくクラブ in 湘南」の説明の後、参加高校生がグループに分かれて、互いの問題意識や関心を分かち合うディスカッションの時間が設けられた。また、1 週間後に実施された交流会では、ゲームやカレー作り、自由時間を利用したアスレチックでの遊びなどが行われ、高校生同士・高校生とサポーターとの交流がとても進んだそうだ。初期段階で高校生同士、また高校生とサポーターの関係性を深められたことは、この後の活動にとって大きな意義があっただろう。

7 月に入ると、いよいよ企画づくりの段階に入る。ここからは基本的に「まちの魅力発信（魅力発信グループ）」と「湘南のまちと震災（震災グループ）」という 2 つのグループに分かれ、高校生が互いの問題意識を分かち合い、

企画を練り上げていくことになる。以下、それぞれのグループが、どのような過程を経て、どのような企画を作り上げてきたのか、見ていきたい。

まちの魅力発信（魅力発信グループ）

魅力発信グループには「江ノ電」（江ノ島電鉄）沿いの高校に通っている高校生が多く参加していた。彼らが話し合う中で見えてきた思いは、「湘南で普段生活している人にも、観光で訪れた人にも、このまちの良さを再発見してもらいたい」というものであった。こうした思いから生まれた企画が、スタンプラリー「なごみあるき」である。

鎌倉には、鎌倉市・由比ヶ浜通りという道がある。鎌倉駅から大仏まで続く道に比べると、訪れる観光客が少ない道だが、昔ながらの魅力が詰まっている商店街だ。高校生たちは、この通りにあるお店の魅力を高校生の目線から伝えるマップを作るとともに、実際に楽しみながら見て回ってもらえるよう、スタンプラリー形式にし、特定の日には高校生が実際に案内をして回るという企画も作った。

この企画には、参加した高校生の様々なアイデアや思いが組み込まれている。例えば、ある生徒は「古いものを大切にしていきたい」という思いを強く持っていた。話し合いの結果、「着物を着てきた人には何か特典がある」「一部区間では、案内人がその土地の歴史を紹介するガイドツアーを行う」というアイデアが生まれた。また、そうした凝った企画であったため、準備に当たっても、お店のリサーチから始まり、お店の人に対しての交渉やインタビュー、見せ方の工夫、チラシやポスター作り、スタンプやマップの作成、そして当日の進行準備に至るまで、様々なことを進める必要があったが、高校生たちは互いの強みを活かしながら、そうした準備を進めていった。

名城さんは魅力発信グループの活動について、「短期間でこれだけのイベントをつくりあげていった高校生に刺激をもらいました。」と振り返る。参加した高校生にはそれぞれ、イラストを描ける、パワーポイントを使える、スタンプを作れるなどの特技があり、個々人の良さを生かしあえる企画となったそうだ。企画に参加した高校生の中には、最初はなんとなく来てみたという高校生もいたそうだが、その高校生は「それでも最後までがんばれたのは他のメンバーがいたから。自分も一緒に頑張らないといけないと思った。」と活動を振り返っている。学校を越え、「彼らとまた一緒に活動したい」という仲間ができることは、地域での次の活動への参加意欲にもつながっていくのではないだろうか。

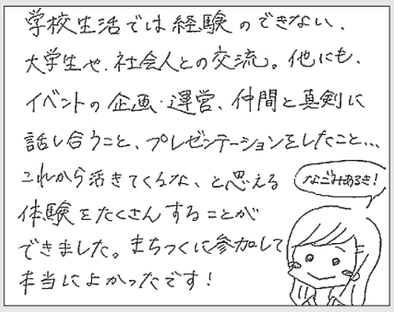
また、まちの大人と触れ合える機会も、高校生にとって貴重な経験となっていた。「和服で来た人には手作りクッキーをあげるよ」というお店や、「スタンプラリーで来た人には弁財天をあげる」というお店など、高校生の活動に力を貸してくれるまちの人たちも、数多くいた。一方で、飲食店に交渉に行ったときには「営業時間を考えなさい。この時間は避けるべきでしょ。」と指摘されたこともあったそうだ。こうした方は、高校生のことを思っているからこそ、あえて指摘してくれたのだと、名城さんは感じたという。まちの大人にこうして指摘してもらえる場面が減っている今、このような経験もまた、高校生にとって貴重なものであっただろう。

湘南のまちと震災（震災グループ）

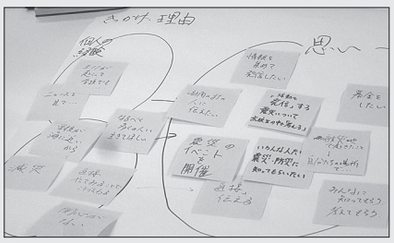
もう一つのグループは、震災グループである。このグループには、被災地に訪れたことがあり復興支援に関心を持つ生徒もいれば、自分たちの湘南地域に震災が起きたときのことを考え防災に関心を持つ生徒もおり、幅広い関

◀写真１
交流会の様子

▼写真２
「なごみあるき」ツアーガイドを務める高校生



▲写真３：参加高校生の感想



▲写真４
「震災グループ」の話し合いの記録

◀写真５
「震災グループ」の企画当日の様子

心や問題意識を持った高校生が集まっていた。

活動の初めには、震災後に宮城でNPOの中間支援業務に携わった経験のある藤沢市市民活動推進センターの方にお話を伺う機会を設けた。その後、それぞれが思ったことや感じたことを共有し、企画の方向性を決めるミーティングを行ったのだが、一筋縄ではいかなかった。

一見すると異なる問題意識を持つ高校生たちの共通の思いは何か。話し合いが進む中で、「被災地の人たちの声を聴き、その経験を自分たちのまちに生かしていくことが大事なのではないか」という、皆に重なる思いが見えてきた。「自分たちもまだまだ知らないことも多くあるから、みんなとまずは考えよう。」「被災地での経験・教訓を踏まえて、自分たちに何ができるか、これから何をすべきか、世代をこえて防災について話し合える場を設けたい。」「被災地の現状や教訓をもっと知ってもらいたい。」このような思いで生まれた企画が「話し合おう『震災』のこと～世代をこえて考える～」である。湘南の幅広い世代の人に集まってもらい、震災に関心の高い人もそうでない人も一緒に震災・防災のことについて話し合う場を作ろうというものだ。

企画は、導入のビデオを見た後に、世代別のテーブルに分かれての話し合い、世代をシャッフルしての話し合い、発表という構成となった。導入のビデオでは、被災地の具体的な教訓を取り上げ防災についての意識を高めてもらいたいという思いから「釜石の奇跡」[注1]について扱った映像を使った。また、話し合いでは全体を4つのグループに分け、高校生がファシリテーターとしてそれぞれのグループに入った。こういった構成も高校生たちが中心に考え、当日も高校生主導で企画が進められた。

今回の活動で震災グループのサポーターが特にこだわったことは、問題意識を固める段階だ。名城さんは当時を振り返る。「確かに大変でした。ですが、震災への関心の観点や意見が異なる中で一つのプロジェクトを練り上げていくというプロセスから、学べることが多くあったと思います。もしかすると、高校生に決めてと言ったら、すぐに『これにしようか』と決まったかもしれません。一度スッと企画が決まりかけたことがあったのですが、よく聞いてみるとちょっと違うと言う子がいたので、敢えてもう少し待つようにしました。」

グループで一つの企画をつくるときには、そのプロセスからの学びが大きい。話し合いを進めていく中でそれぞれの共通する部分が浮かび上がり、皆が納得する一つの企画となった。そうしたプロセスを経て生まれた納得感が、自分たちで作り上げた企画という感覚に結びついたのではないだろうか。

2）インタビュー

続いて、名城さんへのインタビューを通して、「まちつくクラブ in 湘南」のもつ魅力を探ってみたい。

Q：なぜ、「まちつくクラブ in 湘南」に関わろうと思ったのですか？

A：もともと高校生が地域に出てまちの課題解決のために何かをするという学習に関心があり、卒論では総合的な学習の時間やアメリカのサービスラーニング[注2]の研究をしていました。その当時は事例としてしか知らないものが多く、教員志望ということもあり、実際に自分が実践する経験をしてみたいという思いがありました。また、実際に実践づくりに携わることで、文献で事例を研究したり授業を見学したりするのとは違ったことが見えてくるのではないかとも感じていました。そのようなことを感じていたときに、ちょうどメンバー募集をしていた湘南まちいくプロジェクトの説明を聞き、これはピッタリだと感じて参加するようになりました。

Q：では、名城さんが総合学習やサービスラーニングに関心をもつようになったきっかけは、何かありますか？

A：私自身は、高校生の時にこういった機会はあまりありませんでした。沖縄出身なのですが、もっと自分たちの住むまちについて考えることが必要だと、どこかでずっと思っていました。例えば基地問題についても、周りの情報を鵜呑みにするのではなくて、自分たちの目でその問題を見て判断する、それぞれが考えることが必要だと思っていました。単純に答えが出せる問題ではないと思うのですが、答えが出ないような問題に対してどのように向き合えばよいのか、あまり学校の中やこれまでの生活の中で考える機会がなかったと感じています。でも、それって本当はすごく必要なことだと思っていました。

Q:実践の場に関わって、感じたことは？

A：今回、まちつくクラブの活動の中で個人的に一番苦労したところは、「話し合いの中で、私たち大学生サポー

ターが主導し過ぎずに、高校生の考えや意見を引き出すこと、そしてそれらを高校生がまとめやすいようにつなげていくこと」でした。まちつくクラブの特徴の一つとして、あらかじめ決められた活動に高校生が参加するのではなく、高校生自身が企画を考えて実行するという点があるのですが、そうした高校生の主体性を大事にしながら、どのようにサポートをしていくかが鍵になると感じました。活動を重ねる中で、みんなの目に見える形で議論を進めること、一人ひとりが思いを言語化できるように質問を工夫することなどの大切さを感じました。

また、この活動を通して、若い人たちが自分たちの住んでいる地域をよくしたいという気持ちは、地域との接点や地域の人とかかわる機会がどれだけあるかということが影響しているということを、改めて感じました。地域の人たちに温められる中で、高校生が様々なことを発見し、自由にチャレンジしていける機会が、もっと増えればいいなと思っています。

Q：2013 年度の活動を振り返っての成果は何でしょうか？

A：高校生の変化が見られたことが一番です。高校の枠を越えてともに活動を練り上げるという経験を通して、高校生に自信が生まれたようです。また、「まちつくクラブの 1 期生」という共通の帰属意識も生まれたようで、そのつながりを活かして、何かイベントがあれば誘いあう様子も見られました。さらに、震災チームに参加した高校生が藤沢市の市民活動推進センターでボランティアをするなど、「まちつくクラブ in 湘南」の経験をその場限りにせず、次に活かしている高校生も数多くいます。まちつくクラブから他の活動へと繋げていくことは、サポーターの側でももっと意識していかなくてはいけない課題でもありますが、その兆しは見えています。

プログラム参加の前後	前	後
社会参加意欲（地域や社会に参加したいという思い）	4.11	4.25
社会的効力感（自分も社会的課題の解決に貢献できるという自信）	3.50	3.88
地域への関心	4.11	4.21
まちとの距離感（『1. 近い』～『4. 遠い』で自己評価）	2.33	1.75

表 2：参加した高校生へのアンケート結果

アンケートでは、調査した 4 つの項目のいずれも向上していました。また、振り返りシートには「自分から動こうという気持ちはいろいろな場面でもてました」「自分たちで企画を運営していくと言うことに自信がさらについた」という声が上がり、社会へ関わっていこうとする意欲や、自分たちで何かできるという効力感が高まったことが見られました。地域への関心が高まり、まちとの距離感が近づいたことは、企画にあたってまちの人との関わりが多くあったからだろうと思います。

Q：最後に、次年度以降への課題や今後の展望についてお聞かせください。

A：「まちつくクラブ in 湘南」は、運営メンバーの大半が学生ということもあり、高校生とスケジュールを合わせながら進めていくことが困難で、活動日が集中してしまうことなどがありました。来年度は、より余裕をもったスケジュールで進めていきたいと考えています。

また、今回参加してくれた高校生には、生徒会経験者や、もともとボランティアに関心のある高校生が多くいました。しかし、私たちの思いとしては、そうした高校生だけでなく、このような活動にあまり関心のない高校生にも、「まちつくクラブ in 湘南」での同世代の仲間との活動を通して、少しでも自分たちの住むまちに関心を持ってもらいたいというものがあります。今後は、より多様な高校生の参加が増えるように、工夫していきたいと思っています。

終わりに

高校生が、大学生・大学院生・若手社会人・まちの人達と関わりを持ちながら、まちの課題の解決に向けて企画・実行する「まちつくクラブ in 湘南」。その一歩が昨年確かに動き始めた。今後もその活動の発展に注目するとともに、本事例紹介を通して、今後各地での活動が芽吹いていくことにも期待したい。

名城可奈子さん　プロフィール

東京大学学校教育高度化専攻教育内容開発コース修士課程在学中。「沖縄における市民教育」について研究している。沖縄の高校を卒業後、上智大学総合人間科学部教育学科に進学。学部時代の交換留学先オスロ大学に在学時に、市民教育に関心を持ち始める。中高英語科教員志望。

（info@shonan-machiiku.com）

参考文献

◇ 湘南まちいくプロジェクト 2013「まちつくクラブ in 湘南　2013 年度活動報告書」

注 1　「釜石の奇跡」：2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災のとき、釜石市の小中学生約 3 千人が津波から避難し、助かったという事例。釜石市では、東日本大震災以前より防災教育に取り組んでおり、それが小中学生の生存率 99.8% へとつながったと言われている。

注 2　サービスラーニング：学問的な知識・技能を、地域社会の課題を解決するための社会的活動に活かすことを通して、市民性を育むことを目的とした教育方法。

（神野 有希）

書評

学習院大学文学部教育学科
教授　長沼 豊

「シティズンシップの教育思想」
小玉 重夫　著

近年の日本の教育改革においては目先の成果にとらわれるがゆえに、諸外国の教育実践を盲目的に輸入し導入したり、効果がありそうなトレーニングの類を真似てみたりするような教育実践が流行している。手法や技術にばかり目が向き、背景となる概念や思想の理解が不足している感がある。いまシティズンシップ教育の実践及び研究に求められることは流行を追うことではなく、欧州に源流をもつ Citizenship 概念を明確に把握しながら、日本におけるあり方を模索することである。その点本書はまずシティズンシップ概念を基軸としてソクラテスから現代までの教育思想史を丁寧にレビューしていて学ぶ点が多い。

本書では、これまでどちらかと言えば軽視されがちだった政治的素養を学ぶシティズンシップ教育を強調している。その際社会科など教科学習以外に総合的な学習の時間や特別活動の生徒会活動など教科外の教育実践にも期待していると述べている。私は学校教育における児童会・生徒会活動を「民主主義の内容と方法を体感・体験・体得する教育活動」と捉えシティズンシップ教育の視点で重視しており、全く同感である。もともと月刊「教職課程」誌に連載された論考「教師をめざす人の哲学入門」を基にまとめられたもので思想の紹介が中心になってはいるが、本書は日本においてシティズンシップ教育の実践と研究に携わる者にとって必読の良書であることは疑う余地がない。

白澤社 2003 年
全 181 頁
ISBN 978-4768479063

「シチズン・リテラシー -社会をよりよくするために私たちにできること-」鈴木 崇弘 ほか 編著

教育では実践によってどのような力（知識・技能等）をつけるのかが常に問われる。シティズンシップ教育も同様である。本書は市民になるために身につけるべきスキルや素養等の総体を「シチズン・リテラシー」と呼び、市民が社会に参加・参画し、社会をよりよくしていくための考え方や具体的な方法を 19 人の筆者によりわかりやすく解説している。教育を受ける個人の成長・発達だけでなく、社会変容をも視野に入れているため、教育関係者だけでなくボランティア・ＮＰＯ関係者にとっても示唆に富む内容になっている。

内容は政治、法律、経済、国際、グローバルシステム、NPO など多岐に渡っており、シティズンシップ教育のコンテンツ集のようになっている。それらの事項の解説だけにとどまらず、日本における 16 の実践事例が合間に挿入されていてわかりやすい。また各論考の末尾には読者が考えるべき課題が複数示されており、教科書としても活用できることがわかる。いわば「おとなの市民科教科書」と言える。最初のほうの章では日本の民主主義のあり方について言及されていて興味深いが、米国のそれとの比較のみという点はやや物足りなさを感じた。今後本会 J-CEF でもシティズンシップ教育のカリキュラム研究および開発が活発に行われると期待しているが、本書がその基底になる内容を提起してくれていることを特筆しておきたい。

教育出版 2005 年
全 214 頁
ISBN 978-4316801063

長沼 豊（naganuma@good.biglobe.ne.jp）

特集

シティズンシップ教育を進める上で何を大切にするべきか？

社会の構造的な問題への意識付けと、組織的行動の必要性

NPO法人国際ボランティア学生協会
理事　伊藤 章

学生の熱意や行動力で社会を元気にする

私は、大学生中心のNPOである国際ボランティア学生協会（通称IVUSA）という団体の理事兼事務局スタッフをしている。IVUSAは約2,200名の大学生が所属する日本でも最大規模の学生団体であり、国際協力・災害救援・地域活性化・災害救援の4分野で様々な事業を行っている。「学生がその熱意と行動力で、社会を元気にする」がミッションであり、海外における学校や住宅建設、ビーチクリーンアップ、地域のお祭りのサポート、被災地の復旧・復興支援活動などを通して、「共に生きる社会」の実現を目指している。

災害救援活動の様子（写真は、2013年11月に行った伊豆大島での台風被害の復旧活動）男子も女子も泥だらけになりながら、活動しています。

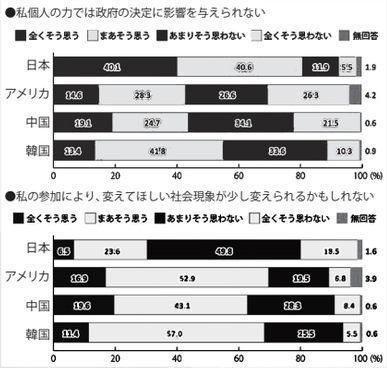
そして、「事業がターゲットとしている社会的課題に対する事前学習→現場での活動→リフレクション（ふり返り）→次回の活動への申し送り」というサービス・ラーニング的なサイクルを大切にし、活動している学生が社会に対するオーナーシップ（当事者意識）やコミュニケーションスキル、課題解決能力などを身に付けて卒業していってもらうことを、私は団体内のミッションとしている。

さて、学生たちと一緒に活動しながら思うのは、いい子たちということだ。地震や水害に遭った被災地に行き、全身泥だらけになりながら、家屋の床下の泥をかき出す。自分たちでアルバイトをしてお金を貯め、カンボジアに行って学校を建てる（そのための募金活動もしている）。その姿を見れば自然に頭が下がるし、まさにシティズンシップの実践ではないかと感じる。

小さな物語に満足する学生たち

しかしその一方で、学生たちが活動先の人との関係のみに意識と関心が向かっていることに若干の危惧も覚えるのも事実である。例えば、IVUSAでは東日本大震災の後、被災地にこれまで30回以上、延べ約3,000人がボランティアとして入っているが、東日本大震災の復興がマクロ的にどのように行われ、復興予算が適切に使われているかという点に関心を持つ学生はほとんどいない。「被災地の人たちから涙ながらに感謝された」「私たち学生にもできることがあった」という「小さい物語」の中からほとんど外に出ないのだ。

その背景にあるのが、「自分たちは社会を変えるような存在ではない」という自己認識である。今の学生たちはよく、「自分たちは社会のことを何もわかっていない」と言う。確かにグローバルな利害関係が複雑に絡み合い、情報が大量に出回り、政治家の集合離散が激しい現在においては、昔の学生運動の時代のように世の中をシンプルに「善」「悪」に分けて行動することが難しい。そのため、よく分からない政治や社会のことよりは、目の前にいる「困っている人」や「仲間」のことを考え、行動した方が充実感や達成感を得られるのであろう。



日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識・調査報告書」（2009年）より。

冷却されていくミッション

今の学生がボランティア活動を行う際にキーワードとなるのが「承認」と「居場所」と言える。受益者から感謝されることによって自分という存在が承認され、一緒に活動する仲間たちとの間に自分の居場所を見つけるという点が多くの学生たちにとってのモチベーションの源になっているのだ。

これは若手の社会学者の古市憲寿氏が『希望難民ご一行様　ピースボートと「承認の共同体」幻想』（光文社新書、2010年）や『絶望の国の幸福な若者たち』（講談社、2011年）で指摘している通りである。

古市氏はピースボートで世界一周をした経験から、「共同性が目的性を冷却する」という問題提起をしている。「仲間がいて楽しければ、もう社会変革とかはどうでもよくなってしまうのではないか」ということだ。つまり、何かの目的性（ミッション）を持った

グループができたとしても、時が経つにつれて、その内部の人間関係の「和」＝共同性を重視するようになり、ミッションへの推進力を失っていくケースが多いのである。

活動の背景を考えさせる

活動現場での体験だけで終わらせるのではなく、背景にある社会的課題や構造的要因について目を向けさせ、継続したアクションに結びつけるにはどうしたらいいかが私の現在の主な問題意識である。ウェスティマーとカーンは、市民教育がめざす「市民像」には「モラル志向型」、「スキル志向型」、「公正志向型」の三つのタイプがあると指摘しており、簡単にまとめれば以下のようになる。これらはお互いに対立するものではなく、総合的に身に付けるべき要素と言えるだろう。

1. モラル志向型　市民＝コミュニティが持つモラル（道徳）を体現した人という考え方。
2. スキル志向型　市民＝市民活動に積極的に参加する知識や能力を持った人という考え方。
3. 公正志向型　市民＝不公正な社会構造を変革し、社会正義（justice）を追求する人という考え方。

その中でも「公正志向」を学ぶ場が少ないと考え、様々な試行錯誤をしているが、正直うまくいっていない。例えば、活動に参加する際は、社会的課題の背後にある構造的な原因を学ぶ研修を義務付けたり、活動に参加した後にレポートを書いてもらい、それにコメントをしたり、必要に応じて面談をしたりする。今の学生の多くは、非常に素直に話を聞いてくれるし、掘り下げて考えていく必要性についても納得してくれる。しかし、政治への関心や何かのアクションに繋がっているかと言われれば、首をかしげざるを得ない。その場では盛り上がっても、長続きしないのだ。

うまくいかない原因はいくつかあるが、最も大きいのは「大学生は４年で卒業する（例外もいるが）」ということある。ようやく問題意識が固まり、コアメンバーとして仕事もできるようになってきたら就職活動が始まり、卒業していってしまうのだ。就職すれば、多くは、仕事に慣れることで精一杯であり、引っ越しや周りの人間関係の大きな変化もあり、活動を継続することは容易ではない。

あとは、古市氏がアイロニカルに指摘するように日本の若者が幸福だからだろう。学生が自分の生活に関わる（と思える）切羽詰まった社会的課題がほとんどないのではないではないだろうか。逆に言えば、切羽詰まった問題を抱えている学生はアクションを起こすほどの余裕はないと考えられる。

では、今後どうしていったらいいかと言えば（シティズンシップ教育を進める上で何が必要かということにも繋がっていくが）、IVUSA の話になってしまうが、卒業した後も継続的に事業に関わる人は少ないため、教育を受けている期間だけでなく、社会に出てからも活動に巻き込む必要があるだろう。

やるべきことをやる

また、シティズンシップ教育の実践とは何らかの企画や活動という形で行われることが多いが、その際に、大人が全部お膳立てをするのでなく、学生にどんどん仕事をさせることが大切である。学生は、「やりたいこと」はやるけど、「やるべきこと」をしたがらない傾向もあるため、時には「やらせる」ことも必要だろう。

実際に社会に変革をもたらすための活動を行おうとすれば、組織的な動きが必要となり、それには調整や報告・連絡・相談（ホウレンソウ）といった地味な作業を伴う。しかし、学生たちはそれらの作業を敬遠する傾向があるのではないだろうか。

その結果、やりたい人たちが集まって小規模な活動を始め（SNS の発達もあり、何かの活動をスタートさせるのは昔に比べとても容易になっている）、社会にほとんど何のインパクトも与えないまま消えていくことが繰り返されているのだ。

極めて陳腐な話になってしまい恐縮だが、モチベーションが下がれば連絡が取れなくなり、途中で責任を放り出してしまう学生（これは IVUSA だけではない）と悪戦苦闘していると、結局「当たり前のこと、やるべきことをする」ことこそが必要ではないかと感じる。

これは政治参画や政策提言などに熱心ないわゆる「意識高い系」の学生にも見受けられる傾向である。「困っている人」の背後にある社会の構造的な課題を目を向けさせるだけでなく、地に足を着けた実務の経験値を身に付けさせることによる「底上げ」こそが、今のシティズンシップ教育に最も求められていることなのではないだろうか。

伊藤 章（ito@ivusa.com）

参考文献

◇ 古市憲寿　2010『希望難民ご一行様　ピースボートと「承認の共同体」幻想』光文社新書
◇ 古市憲寿　2011『絶望の国の幸福な若者たち』講談社
◇ 若槻健　2005「市民性教育のためのサービス・ラーニング」,『部落解放研究』No163（2005 年 4 月）, pp67-79, 一般社団法人部落解放・人権研究所
◇ Westheimer, J. & Kahne, J. (2004) "What Kind of Citizen? :The Politics of Educating for Democracy", *American Educational Research Journal*, vol.41, no.2, pp.237-269.

何のための＜シティズンシップ教育＞？ —シティズンシップと社会デザイン

立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科
教授　中村 陽一

1．はじめに

筆者は、普段は主に「社会デザイン」について、多様な背景と経験をもつ社会人院生たちと共に探究している。元々民間在野でNPO/NGO（以下便宜上NPOと略）、企業、政府行政との関わりで長く仕事をしてきた経験を活かして大学の世界にシフトして18年になる。

当然、学部学生にもNPOなど活動組織の話をすることは多いが、彼らが皆そうした場で働くとは限らないし、残念ながら日本のNPO等はまだそこまでの受け皿にはなっていない。では学生たちが、たとえばNPOを学ぶ意味は何なのか。私は「市民学習としての授業」と言っている。これから企業で働こうが公務員になろうが、あるいは他の仕事に就こうが、広義のNPOとの関わりは必ず出てくる。それを通して仕事の意味を考えたり、自分の仕事自体に活かすことも増えてくるだろう。そのとき、この分野は全然わかりませんというのでは、「（市民）社会人」としては物足りない。そこを認識してもらおう、と考えている。

ただ、理想像を語るだけでは不十分だ。社会問題を解決しようとする運動としてのNPOは、社会に理不尽な現実があるから存在しているわけで、大学正課としては、なぜそういう問題が存在しているのか、世の中は矛盾や不条理に満ちているけれどもそこで何をするのか、専門性を活かしつつ語る必要がある。リアリティをもって投げかけることが大事だと思う。

他方、正課外では「自主ゼミ」を開き続けている。単位とは無関係だが、口コミで広がり、多いときは50名ほど参加することもある。ある年のテーマは、「年越し派遣村」「時間の社会デザイン—アンプラグドな生き方」「ソーシャルベンチャーは世界を変えるか」「NPOのつくる新しいコミュニティ—シブヤ大学のチャレンジ」「ユニクロのCSRは服を変え、常識を変え、世界を変える」等々。これは社会人院生との付き合いがあって実現している部分も大いにある。

現場で／から学ぶ経験知と大学で学ぶ専門知、そして新しい市民知、これはたんなる足し算ではないと考えている。このような自らの実践をふまえつつ、シティズンシップ教育を進めるうえで大切にしたいことを考えてみたい。

2．社会デザインという考え方と実践—シティズンシップ教育が直面する現実に対して

「ネット依存で『考える力』が衰えていないか？『だってネットに出てたもん』を考える」と題した特集を『月刊Journalism』（朝日新聞出版）2014年2月号が組んでいる。書き手の一人、橋元良明氏（東京大学大学院情報学環教授）の論稿は「ほかの人の立場や考えが排除された中で自分たちにとって都合のいい情報の共有化が進む」とさらに踏み込んでいる。

もし事態がその通りだとすると、昨年の本フォーラム設立シンポの開会で筆者が挨拶させていただいた「シティズンシップ教育は異なる価値観が響き合う場を社会に広げていく教育だと考えている」という方向性とは対極にあるものだといえる。そこでは「共同体主義とリテラシーの両方を」視野に入れ、「論争的な課題を議論しながら参加していく」（小玉重夫代表による総括講演より）ことは望むべくもない。

ここには、あらためてシティズンシップ教育が向き合うべき現実と課題の一端が浮き彫りにされている。そこにおいて、私たちにはどのような実践と考え方が必要なのだろうか。自らの実践に引き付け、社会デザインというキーワードから述べてみたい。

●社会デザインという考え方

21世紀に入り、環境や地域紛争など前世紀からの宿題に加えて、新しい形の貧困や社会的排除（social exclusion）が世界と日本の大きな課題となっている。その解決のため、政府行政・企業・NGO/NPO等の組織はそれぞれどのような役割を担うのか。また、セクターを越えた「協働」は、どこまでの有効性と可能性を期待できるのか。

異なる価値観を持つ人々が共生していくための知恵や仕掛けや仕組みとしての社会と、そこでの人々の参加・参画の仕方を、これまでの常識にとらわれず、根底的という意味でラディカルに革新（イノベーション）していくことが、いま求められ始めている。そうした思考と実践のありようを、筆者は「社会デザイン」と呼んできた。

designとは、これまで日本において考えられてきたように、製品やサービスのたんなる設計や絵を描くことに留まるものではない。それは、先に述べた社会の仕掛けや仕組みを大胆に組み替えていくことであり、「いまここではないどこかとなにものか」を求め続ける一連のプロセスでもある。それは、まだ十分に可視化されてはいないものの、確かに存在感を強めているネットワーキングとかシナジー状とかリゾーム状といったイメージと深く結びつくと同時に、何より「市民社会」の創造という長年の「宿題」とあらためて向き合う問いでもある。

こうした社会デザインをめぐる「鳥の眼」を確実に育むことが大切な一方で、非営利・公共分野と関わる社会的な活動諸組織の運営・経営人材はもとより、多様な参加の仕方をもってそれらの場に関われる人たちを輩出することや、NGO/

NPO・危機管理・ネットワークをはじめ、コミュニティデザイン・平和構築・安全保障、さらには、ＣＳＲやソーシャルビジネス（コミュニティビジネス、社会的企業）など事業性豊かな領域にまでおよぶ具体的課題へのアプローチといった「虫の眼」もまた、国内外の多様なネットワークを活かして実践的に展開していくことが重要になっている。

流行し始めているちょっといいアイデアやスキルやマニュアルに留まることなく、変化を課題の解決へ向けて前に進め続け、その変化を現実のものにしていく粘り強いプロセスを歩むため、理論的・構造的な追究はもとより、現場と往復し、当事者性と内発性をそなえた実践的な学びを重視したい。他者と出会い、交信し、関係性を編み直すなかで当事者性にも出くわす。そんな更新作業（対象化）の連続はダイアログとしてのデザインであり、デザインをデザインし直すことにもなる。

いうまでもなく、そうした知的営為の根底には、地域や生活といった足元、根元からの人びとの営みがある。夢を現実のものにしたいと格闘する人たちが、「後戻りできない市民」（吉川勇一）として、多様な経験を「継承」しつつ担ってきた歴史をふまえ、新たな方法論と表現を獲得していくことは、あらゆる学びの場が持つ社会的責任でもある。

●社会デザインという実践―つながりを編み直すワーク、活かすワーク

日常生活のなかで、残念ながら、人は「正しさ」（社会やコミュニティへの貢献、運動としての正しさ etc.）だけでは行動できない。何かやろうと思っても、どこで何をすればいいのかが具体的にならないことも多い。そんなとき、「正しさ」と「楽しさ（や豊かさ）」を同時に求めながら、人々のなかに「行動の起動力となる精神のバネ」（鶴見俊輔）を生み出していくことが、社会デザインにとって大事になる。

今日、デザインは社会デザインとして、人間の生活と社会全体に関わり、課題を解決し幸福を生み出すために、想像力や構想力を駆使して関係性に働きかける営みと読みかえられつつある。デザインは世界を変えるイノベーションの重要な発想であり、手法であり、あえていえば哲学・思想であり、「残りの 90％のためのデザイン」（ポール・ポラック）として、貧困（の解消）・社会的責任・ソーシャルビジネス（以下、SB と略）といったキーワード群と結びつけられるようになっている。

そこで行われていることを筆者は「つながりを編み直すワーク、活かすワーク」と呼びたい。それは活動・仕事（ワーク）であり、稼ぐための労働とは性質を異にする。たとえば、SB を例にとってみよう。SB は社会的課題をビジネスの手法で解決する事業として、社会性・事業性・革新性をもつものとされてきた。だが筆者はそこに関係性というキーワードを持ち込みたい。SB は市場経済と非市場経済（「贈与」の経済やボランティア経済など）を越境しながら、関係性（つながり）がデザインする社会（コミュニティ）を創り出そうとする。ビジネスはマーケットに切り込み、競争を勝ち抜いて拡大発展することを目標とするが、SB は関わりやつながりを編み直し、活かすことに腐心する。

そうした「ソーシャル」な側面は、ビジネスにおいても注目を集めている。経営学では、ソーシャル・キャピタルやウィーク・タイがキーワードの仲間入りをしているし、ビジネスの現場でも企業は成員個々の持つリソースやネットワークにもとづくパフォーマンスをいかに有効に組織にフィードバックできるようにするかを課題とし始めている。

このような動向が、長期失業にさらされている（25 ～ 34 歳の長期失業者数は 2011 年時点で 28 万人となり、20 年前の 7 倍、2001 年より 3 割増、長期失業者の 27％。総務省労働力調査データ）若い世代にも、SB への関心をもたらしている。

たとえば、病児保育という社会的課題へのチャレンジで知られる NPO 法人「フローレンス」代表・駒崎弘樹さんは、待機児童問題解決のための「小規模保育」という新たな形態を「子ども・子育て支援法」に盛り込む原動力となった。自身、育休を取得した経営者でもある。

日本三大寄場の一つ、釜ヶ崎を含みこむ大阪・西成の商店街にあるココルームは、10 代の頃から「ニューウェーブ詩人」として知られ、現在は天王寺の應典院（檀家なし、葬式なし、地域の教育文化振興に特化した劇場型の地域ネットワーク寺院）で詩の学校も開催する上田假奈代さんが代表を務めるアート NPO「こえとことばとこころの部屋」が運営するインフォショップ・カフェ。アートと社会の接続点、人々のつながりをつくる場所をめざしている。小さな店にはアーティスト、アクティビスト、高齢者、働く人、こども、旅人等々、世代も職業も多様な人たちが集い、トークイベントやライブも開催され、情報交換の場所、発信の拠点として、真向いの「カマン！メディアセンター」とともにコミュニティの拠点となっている。

こうしたワークによる社会デザインは、韓国の新しいまちづくりにおいても展開されている。ソウルのソンミサンマウルの住民による共同保育に端を発した活動は、社会的企業のネットワークが形成されつつ、教育・食・協同組合・アートなど多彩な分野で広がる点で、日本のまちづくりとも多くの共通点を有している。

成長経済、市場経済のみを前提とする地点からは描きにくい展望を、関係性の経済と「つながりのワーク」は提起しようとしている。日本の社会に「官民協私」のセクターを形成し、小商いを現代的に蘇生させるといった「不穏当なファンタジー」への胎動が始まっている。歴史をこじあけようとする歩みに誘惑される人たちが分水嶺を超える日は案外近いと感じるのは筆者だけではないだろう。そこでシティズンシップ教育にできることを考え、実践していきたいと思っている。

中村陽一（nakamura@rikkyo.ac.jp）

参考文献

◇ 総務省　2012 年 「労働力調査（詳細集計）平成 24 年 7 ～ 9 月平均」

お知らせ

【イベント情報】第１回「シティズンシップ教育ミーティング」参加申込受付開始　2014.03.15 ～ 16

日本におけるシティズンシップ教育のさらなる発展を目指して、現在シティズンシップ教育に携わっている方たちや、そうした取り組みに関心のある方たちがともに集い、よりよい実践ポイントを探ったり、問題を共有して解決策を検討する、そして互いに結びつく機会として「シティズンシップ教育ミーティング」を開催いたします。このたび、参加申込受付を開始いたしました。皆様のご参加をお待ちしております。

テーマ：「シティズンシップを育むとは？」
日　時：2014 年 3 月 15 日（土）13：00 ～ 16 日（日）16：30
場　所：立教大学（予定）
対　象：J-CEF 会員および本企画にご関心のある方
参加費：会員 3,000 円・非会員 5,000 円（１日目全体会及び、１日目第一セッションのみ無料開講）
定　員：100 名（予定）
申込〆切：３月７日（金）17 時

※プログラム内容や申込方法につきましては、募集チラシもしくは J-CEF の web サイト（http://jcef.jp）をご覧ください。
　当日の運営ボランティアも募集中です！

【後援名義協力】「価値判断力・意思決定力を育成する社会科授業研究会」第10回大会記念大会 2013.10.19

表題の研究会に、日本シティズンシップ教育フォーラムが後援団体として名を連ねさせていただきました。

【事務局より】

● J-CEF web サイト内「会員専用ページ」公開

J-CEF 会員のみがログインできる「会員専用ページ」を web サイト内に公開しました。教材やセミナー記録が閲覧・ダウンロードできる「シティズンシップ教育関連資料」、会員の皆様の研究や実践分野に関する情報にアクセスできる「全国各地の J-CEF 会員一覧」などのコンテンツを利用いただけます。今後の活動の展開にともなってより一層充実させていきますので、ネットワーキングやノウハウ共有にぜひご活用ください。＞＞ URL：http://jcef.jp

●「学校教員のためのシティズンシップ教育実践テキスト」発行準備進行中

学校における多様な形でのシティズンシップ教育の事例の理解を深め、同時にその高度化を推進することを目指し、シティズンシップ教育の実践テキストを発行する予定です。シティズンシップ教育に関心を寄せていたり、または既に実践に取り組んでいたりする学校教員の方を主な対象とします。2015 年度の発行に向けて準備を進めていますので、ご期待ください。

●ボランティア募集

J-CEF では、事務局のボランティアとして、活動をお手伝いしてくださる方を随時募集しています！ご関心のある方はお気軽にお問い合わせください。
担当業務内容：事務局総務、セミナーレポートの作成、ニュースレター取材補助等
活動拠点：兵庫県、東京都ほか（担当業務内容や、居住されている地区に応じて調整いたします）
活動頻度・時間帯：応相談
担当：鈴木　Tel：070-6506-0369　E-mail：info@jcef.jp

J-CEF NEWS
no. 2
2014 WINTER

発行
2014 年 2 月

編集
日本シティズンシップ教育フォーラム（J-CEF）
〒 661-0965
兵庫県尼崎市次屋 1-2-20
ハイツアメニティ 2-203
tel.070-6506-0369　e-mail info@jcef.jp

定価
会員無料